

<書評>

Elaine Weiner 著

Market Dreams: Gender, Class, and Capitalism in the Czech Republic. Michigan, The University of Michigan Press, 2007 年, 155 頁, 24.95US ドル

坂田 敦志*

チェコは中東欧の小国である。しかし、ヨーロッパの心臓とも呼ばれる、その地政学的な位置から冷戦期においては東の最前線として重要な役割を果たしてきた。同国での自由化・民主化運動の高揚を懸念したワルシャワ条約機構軍による軍事介入(チェコ事件)は、チェコが東陣営の中で占めていた地政学的な重要性を示している。本書はジェンダーと階級という二つの切り口から、1989年の社会主義政権の崩壊後、「圧政」から解放されたチェコの人々が、ネオ・リベラリズムという新たな旗印の下、東の亡霊を振り払い、西側へ同化すべく邁進する姿を的確に捉えた良書である。

著者は第1章の冒頭で、『チェコの夢』という映画を取り上げる。2004年に封切られたこの映画は、プラハ郊外に新しいハイパー・マーケットがオープンするというデマに翻弄される人々の様子をドキュメントしたものである。著者はこの映画を枕に、社会主義政権崩壊後のチェコの人々の資本主義への熱狂を指摘した上で、本書の狙いを次のように述べている。「本書は、ポスト社会主義を生きるチェコの人々が、資本主義によって『輝かしい未来』がもたらされるという、自由市場に関する夢をどのように解釈しているのかという点に焦点を当てる。具体的には、製造業に携わる74人の女性経営者および女性労働者が、己の現実と夢との間に不一致があるにも関わらず、いかにしてそのロジックを肯定し続けているのかを扱う」[p.5]。

本書は上記の狙いを達成すべく、六つの部分から構成されている。まず、第1章「イントロダクション」では、先行研究の概況と問題点、本書の位置付けなどが示される。続く第2章「二つのロジック、一つの人生」では、社会主義政権下において、チェコの女性たちがどのような生活を送っていたのかが素描される。第3章「ベルベット革命」では、市場化を牽引した指導者たちの言説が取り上げられ、1989年以降、チェコ社会を席卷した「市場に関するメタ物語」の「輪郭と核心」が明らかにされる。第4章「合理的な経済的人間(女性)(Rational Economic (Wo)Men)」、第5章「誰もいない土地」では、製造業に携わる74人の女性経営者・労働者の語りを取り上げられ、指導者たちが示した「市場に関するメタ物語」を彼女たちが各々の立場からどのように肯定し続けているのかが論じられる。そして、第6章「結論」では、第2章から第5章の議論が総括されている。

* 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

著者によると、社会主義政権崩壊後のチェコでは、新たな経済体制を賛美する物語が、当該体制の「敗者」であるはずの女性や労働者によっても支持され続けるという逆説的な状況が展開されているという。本書評では、ポスト社会主義研究において重要なトピックの一つとなっている、この逆説的な状況を著者がどのように論じているのかという観点から、本書の中心的な章である第3章以降に絞って、その勘所を紹介したい。

第3章「ベルベット革命」において著者は、1989年以降、チェコを席卷した自由市場に関するメタ物語(metastory)¹の核心を明らかにしようと試みている。著者によると、中東欧の中でチェコほど自由市場のイデオロギーを熱狂的に歓迎した国はないという。1997年から1999年にかけての景気の後退局面においても、その熱狂は冷めなかった。こうした事態を踏まえ、著者は本章の目的を、「人々の自由市場への献身」を生じさせた「言説の輪郭と核心を素描する」ことにあると述べる。著者は言う。「私はチェコにおいて流通している市場をめぐるメタ物語が、人々の文化的野心や歴史的感覚にどのように働きかけているのかを議論したい。その核心にあるのは、善が必ず悪を倒すというお伽話である」[p.43]。

指導者たちは市場化を牽引する際、どのような物語を提示して世論に働きかけたのであろうか。著者はこの点に関して、1990年3月に当時の首相ヴァーツラフ・クラウスが「文学新聞」に投稿した記事「なぜ私はオプティミストなのか」を紹介する。「私は我が国の富を信じている。それは、1500万のチェコスロヴァキア市民の叡智であり、技術であり、そして実行と適応の能力である」。クラウスとその取り巻きたちは、しばしば、「黄金のチェコ人の手」という表現を用いて、人々の民族意識に働きかけたという。曰く、社会主義政権下では、黄金の手は完全に眠らされており、その矜持を失っていたが、新たな社会契約を確立することによって、我々はこの手を復活させることができる。

果たして、これらの物語はチェコの人々にどのように受け入れられたのであろうか。「黄金の手」にまつわるレトリックの効果に関して、著者はカベレの議論に依拠しながら、次のように述べている。「チェコの人々にとって、市場は超越的希望と結びつけられた『神話的形象』となった。この、自由市場という名の新たなメシアは、彼らに『聖なる救済』という言葉を想起させた。(中略)人々にとって、市場化は、社会主義国家によって粉砕された、前社会主義時代の市民性および合理性への回帰をも意味していた」[p.58, 62 (中略は評者による)]。さらに著者はこう続ける。「この、市民性および合理性への回帰は、それによって、彼らが『歴史に帰り』、『ヨーロッパへ帰る』ことができるような、空間的、時間的な復古を含んでいた。(中略)市場化は、時間および空間における復古を意味していたのである」[p.62 (中略は評者による)]。著者によると、チェコの人々にとって、市場化は全

¹ 本書において、メタ物語(metastory)という用語は、メタ・ナラティブ(metanarative)と同義で用いられている。第1章において、著者はメタ・ナラティブ(メタ物語)と単なるナラティブ(物語)を自然性という観点から区別すると述べているが、本書における実際の使用法をみると、メタ・ナラティブは指導者たちの言説、単なるナラティブは人々の個人語りといった意味合いで使われている。

く新しい事態ではなかった。彼らにとって、社会主義から資本主義への移行は、自分たちが元いた場所、すなわち、「ヨーロッパへの回帰」だったのであり、この回帰すべきヨーロッパとは、個々人が自助と責任の精神を身に付けた、市民性および合理性に支配された世界だったというわけである。この場面で著者は、1989年の社会主義政権崩壊後、チェコ共和国を席卷したメタ・ナラティブ(metanarrative)の特異さを浮き彫りにしている。

以上概観してきたように、第3章において著者は、市場化を牽引した指導者たちが人々に示した物語の「輪郭と核心を素描する」ことによって、チェコの人々にとって、社会主義から資本主義への移行が、「市民性および合理性」に支配された「ヨーロッパへの回帰」という意味合いを含んでいたという事実を明らかにした。続く第4章「合理的な経済的人間(女性)」において著者は、製造業に携わる女性経営者たちが、これらの物語を己の現状とどのようにすり合わせながら生きているのかを明らかにしようと試みている。

著者によると、女性経営者たちは、ポスト社会主義の世の中で成功するかどうかは、責任感、自律性といった態度を習得しているか否かにかかっていると考えていたという。彼女たちは依存、無責任といった社会主義時代の悪しき態度を捨て去り、「自助、責任感、自律性といった自由市場に適合した行動を身に付ける」ことによって、「よい市民」たりえていたからこそ、自分たちがポスト社会主義の世の中で成功していると考え、しばしば己の態度を「周縁的『他者』」、すなわち労働者たちと対比させたという。

ここで著者は非常に重要な指摘をする。それは、女性経営者たちが己の現状とメタ物語が矛盾しないよう、己が女性であるという意識を抑圧したという指摘である。女性経営者たちは、己が女性であるという意識を抑圧した地点から、自分自身を、己の利益を最大限に追求する合理的な経済人間(the rational economic man)、ホモ・エコノミクスであると想像したという。著者は幾人もの女性経営者たちの語りを紹介した後、それらを次のように総括する。「チェコ的女性経営者たちは、自分が女性であるという事実を意識すると、己の現状と市場に関するメタ・ナラティブとを一致させることができなくなってしまうことを知っていた。女性であるという足枷は、市場のメタ・ナラティブと矛盾するのである。『勝者』としてのアイデンティティを打ち立てるためにも、彼女たちは決して『敗者』となるわけにはいかない。よって、メタ物語との葛藤の中で、女性経営者たちは、己が女性であるという意識を抑圧しなければならなかった」[p.82]。

しかし、女性経営者たちは、己が女性であるという事実を封印するだけでは、自身の現状とメタ・ナラティブとを完全に一致させることはできなかった。彼女たちには埋めなければならないギャップがもう一つあったのである。この点に関して、著者は次のように説明する。「市場に関するメタ・ナラティブ」は、「市場の外側の領域」である「家庭の領域」に関しては沈黙していた。よって、彼女たちはそのギャップを埋める必要に迫られていた」[p.85]。女性経営者たちは、社会主義時代、国家の強力な統制の中で相反していた公私の垣根を融解させ、市場で求められた合理性の基準を家庭の領域にも持ち込むことで、メタ・

ナラティブとのギャップを埋めようとしたという。著者は「メタ・ナラティブとのギャップを埋める」にあたって、彼女たちが用いた二つの戦略を紹介している。一つは、ハウス・クリーニングやベビー・シッター、デリバリー・サービス等を利用する戦略、いま一つは家事の分担である。

このように第4章では、製造業に携わる26人の女性経営者たちが、自らが女性であるという事実を封印し、家事の領域にまで「合理性」を持ち込むことで、己の現状とメタ物語とのギャップを埋めようとしている様子が明らかにされた。続く第5章「誰もいない土地」において著者は、同じく製造業に携わる48人の女性労働者たちの言説に焦点を当て、彼女たちが新たな経済体制の恩恵にあずかれないことが明らかとなってもなお、当該体制に希望を抱き続けるということがいかにして可能になっているのかを明らかにしようと試みている。

社会主義政権が崩壊し、新たな経済システムが導入される中、女性労働者たちはどのような状況に追い込まれていったのであろうか。この点に関して、著者は彼女たちの語りを適宜参照しながら、次のようにまとめている。女性労働者たちは、女性経営者たちと異なり、学歴や「英語、ドイツ語、フランス語の知識」といった「文化(人間)資本」を持っていなかったため、多くのチャンスを生かすことができず、新たな市場経済の中で、経済的、社会的に周縁に追い込まれていくこととなった。物価の急激な上昇に賃金が伴わず、日用品すら手に入らない状況の中で、彼女たちは常に失業の恐怖に怯えていた。女性労働者たちは生活保護の事務所を訪れる度に、自分たちが新たな市場経済の中で、「弱者」であり、「乞食」であり、「ジプシーのよう」であるということを思い知らされることになった。また、妊娠し母親になる可能性の高い35歳未満の女性、ならびにリタイアが視野に入り始めた45歳以上の女性たちは、労働市場において周縁的な位置に追いやられ、一旦失業した女性労働者たちは新たな職を探す際、非常な困難を強いられることになった。社会主義から資本主義へと体制が変わっても、彼女たちは一貫して母親としての「自然な」役割を求められ続け、賃金等の待遇面での男女格差は広がる一方であったが、全てが自己責任であるというスローガンの下で、一切の組合活動が禁止されていたため、残業を強要し、賃金カットを断行する経営者に声を上げることもかなわなかった。

しかし、女性労働者たちはこのような困難な状況にあっても、決して新たな経済体制を見限ることはなかった。この点に関して著者は、幾人もの女性労働者の語りに依拠しつつ、次のように述べている。「女性労働者たちは己を愚者と蔑んだ。彼女たちは、自分が抱える根本的な欠陥は、『社会主義』の病なのであり、自分は社会主義に感染し、その混濁から逃れることができていると考へた」[p.114]。このように、女性労働者たちは己の不遇の原因を旧時代に求めた。彼女たちは、指導者たちが嘘を言っている、あるいは資本主義が悪いのだとは考へず、自身が依存、無責任といった社会主義時代の悪しき態度に染まり切っていて、新時代の精神を身に付けることができているからこそ、新たな経済体制の中で

不遇を強いられることになったと考えた。

しかし、人間は希望がなければ生きていけない。自分が悪い、資本主義は悪くないという認識のみでは、不遇の中で耐え忍ぶことはかなわない。一体、彼女たちは何に希望を託し、「ポスト社会主義の煉獄」を耐え続けているのであろうか。この点に関して著者は次のように述べている。「チェコの女性労働者たちは、自分たちが『よりよい生活』を送るという希望は捨てたが、それでもなお、資本主義に希望を託し続けた。勝利は自分が勝ち取ることはできないけれども、必ずや、未来の世代が勝ち取ってくれるはずである。(中略)女性労働者たちの多くは、未来の世代が『よりよい生活』を勝ち取ってくれると考えていた」[p.115 (中略は評者による)]。社会主義の病に冒されてしまった我々は、資本主義の恩恵にあずかることはできない。しかし、新しい教育の下で、責任感、自律性といった新しい態度(市民性)を身に付けるであろう未来の世代は、必ずや、その恩恵に浴することができるとは思われる。著者は、女性労働者たちが、新たな経済体制の中で激しく困窮しているにもかかわらず、それでもなお、この体制に希望を持ち続けていることの不思議、「ポスト社会主義のパラドクス」をこのように説明している。

以上、体制変革の「敗者」であるはずの女性や労働者が新しい体制を支持し続けるということがいかにして可能なのかという問いに、著者がどのような回答を与えているのかという観点から、本書の勘所を順次紹介してきた。以下では、本書がどのような可能性を有しているのかという点に関して、評者の意見を簡単に記してみたい。

著者は第1章「イントロダクション」において、従来のポスト社会主義ジェンダー研究が、女性たちが「敗者」である(新たな体制の下で女性たちが困窮している)ということのア・プリオリに前提してしまっていて、その事態を個別具体的なコンテキストから十分に捉え切れていないと指摘し、本書をこうした先行研究が孕む問題点を乗り越え、女性たちの「経験の生々しさ」を明るみに出す点にあると宣言する。しかし、果たして本書は、従来の研究が孕んでいた上記の問題点を解消し、その目的を達成し得ているのであろうか。残念ながら評者は、この点に関しては否と言わざるを得ない。たとえば、第4章において著者は、女性経営者たちが自らが女性であるという意識を抑圧することで、己の「勝者」としてのアイデンティティを打ち立てていると主張する。しかし、このシナリオには、すでに「女性は『敗者』である」という前提が含まれている。「女性は『敗者』である」という前提の下でのみ、己の「勝者」としてのアイデンティティを打ち立てるにあたって、己が女性であるという意識を抑圧する必要があるのである。「抑圧」にまつわるレトリックは、論者の前提をあぶり出す。

そもそもの問題は、著者の問題設定の仕方の中にある。繰り返し述べてきたように、本書において著者は、女性たちが新体制の下で「敗者」であるにもかかわらず当該体制を支持し続けるという「ポスト社会主義のパラドクス」に回答を与えることを目指している。言うまでもなく、このパラドクスがパラドクス足り得るのは、女性が「敗者」である(女

性が困窮している)と前提したときのみである。「女性は『敗者』ではない」という前提の下では、いかなるパラドクスも生じ得ない。「ポスト社会主義のパラドクス」は、「女性は『敗者』である」という前提の下ではじめて成立するのである。このように考えると、「女性は『敗者』である」という前提は、著者が議論の出発点に設定した「ポスト社会主義のパラドクス」の中にすでに潜んでいたということになる。かくして、製造業に携わる74人の女性たちは、「敗者」であるにもかかわらず資本主義を信じ続ける健気な存在に仕立て上げられ、著者が明るみに出すはずであった女性たちの「経験の生々しさ」は、アカデミックな謎解きの中で矮小化されてしまう。

しかし、だからといって、本書が無意味であるということには決してならない。評者は、一連の謎解きの過程で漏れ聞こえてくるノイズの中に本著作の可能性をみる。たとえば、それは本書第5章「誰もいない土地」の中の小さなパッセージに現れる。著者はこの場面で、女性労働者たちの失職に対する恐怖をあぶり出すべく、職を失うことを己のアイデンティティの喪失と捉えるマーシャという女性労働者の語りを紹介し、それに次のようなコメントを付している。「資本主義の激烈さに直面して、女性労働者たちは時折、社会主義時代の穏やかな安定感に対して強いノスタルジーを表明した」[p.106]。著者はこの後、近年、東ドイツで表面化した「オスタルギー」(社会主義時代に対する強烈なノスタルジー)現象に触れるも、議論をそれ以上深めることなく、何事もなかったかのように次の話題へと議論を進めている。しかし、ネオ・リベラリズムの圧倒的な勝利を強調する本書に刻み込まれた、この小さな「汚点」は、右(西)向け右(西)の大合唱に潜む軋みの所在を的確に照らし出している。そして、この密やかな軋みの実在性は、著者が本書の冒頭で紹介した『チェコの夢』の作り手たちの立ち位置によって速やかに承認される。著者は素通りしてしまったが、ハイパー・マーケットがオープンするはずの空き地で右往左往する人々を風刺する『チェコの夢』の作り手たちは、右(西)向け右(西)の大合唱の中にいながらも、この合唱を対象化し得る位置に立っているのである。

本書の「可能性の中心」は、これらのノイズの中にこそある。女性労働者たちが示した社会主義時代に対するノスタルジー、そして『チェコの夢』の作り手たちが示した風刺的な態度。もし、これらの軋みを起点に議論を組み立てることができれば、本書とは異なる形で、現在のチェコの人々が絡めとられている想像力の一端に迫ることができるのではないか²。この気づきこそ、本書が評者に与えてくれた、ささやかな「希望」である。

² たとえば、チェコ共和国では、社会主義を経験した中東欧諸国の中で唯一、党名に共産主義を残すボヘミア・モラヴィア共産党が、2002年の下院選挙では18.5%、2006年の同選挙においても12.8%の得票率を獲得している。支持者たちは、「資本主義の激烈さ」に直面して、「社会主義時代の穏やかな安定感」を懐かしんでいるのであろうか。それとも、新体制を見限り、何かしらの希望を共産党に託しているのであろうか。いずれにしても、西側諸国から「ポスト社会主義国の優等生」と称賛されるチェコにおいて、共産党支持者が少なからず存在し続けているという事実は、人々が社会主義時代をどのように捉え返し、資本主義体制をどのように受

(2010年4月16日採択決定)

け止めているのかという問いに、本書とは異なる仕方でアプローチする際の出発点となるであろう。